

人形は女の子のものなのか 人形をめぐる近現代史

講師 吉良 智子氏

日本学術振興会特別研究員—RPD

専門は近現代日本美術史、視覚文化論。近代日本の女性アーティストと戦争、ミュージアムにおける戦争展示とジェンダー、近現代日本における人形とジェンダーについて研究している。主な著書・論文は、『戦争と女性画家 もうひとつの「近代」美術』（ブリュッケ、2013年）、『女性画家たちの戦争』（平凡社、2015年）、『ハワイ・アリゾナ記念碑における日本の表象とジェンダー』（『ジェンダー史学』2017年12月）、『「あるべき」女兒用人形とは何か——「妊娠」した女兒用人形をめぐる——』（山崎明子、藤木直実編著『〈妊婦〉アート論 孕む身体を奪取する』（青弓社、2018年）など。

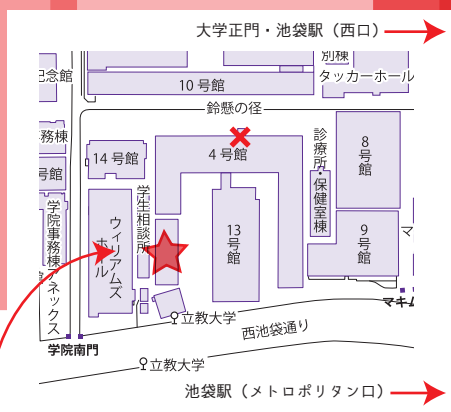
現代社会において「人形は女兒の文化に属する」という価値概念は支配的である。しかし、前近代では多様な階層やジェンダーに親しまれた文化であった。こうした大規模なパラダイムシフトは日本の近代化と歩みをともにしている。つまり、西欧のジェンダー観の社会への浸透とともに、次第に人形は女兒文化に位置づけられるようになった。

本セッションでは、このような歴史をたどりながら、明治初期の国語教科書『小学読本』『少女之友』『少女倶楽部』などの戦前の少女雑誌、戦中の慰問人形、リカちゃん人形をはじめとした戦後のファッションドールなどを例に、人形を通して少女たちに課せられたジェンダー役割について考えてみたい。

2018年7/23(月) 18:30-20:00

立教大学

池袋キャンパス 4号館別棟1階4151教室



※会場はこちらです。4号館正面入り口からは入れません。案内板をご覧ください。

お子様を連れてご参加を希望される方は事務局にご相談下さい。

主催・お問い合わせ先 立教大学ジェンダーフォーラム
TEL/FAX : 03-3985-2307 E-mail : gender@rikkyo.ac.jp
<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>

入場無料
申込不要

